

平成28年度長崎市提案型協働事業

2次審査会・中間報告会 会議録

◆ **日時**：平成28年10月22日（土） 13：00～15：20

◆ **場所**：長崎市立図書館 新興善メモリアルホール

◆ **出席者** 審査委員長 山口 純哉 （長崎大学経済学部 准教授）
委 員 今村 晃章 （NPO法人ミディエイド 代表理事）
古賀 弥生 （活水女子大学文学部 教授）
高野 幸恵 （トムテのおもちゃ箱 代表）
中田 慶子 （NPO法人DV防止ながさき 代表）
事務局 市民協働推進室

◆ **次第**

2次審査及び中間報告 プレゼンテーション及び質疑応答

委員長コメント

1 公開プレゼン2次審査会・中間報告会

◆ プレゼンテーション後の質疑応答

アスレティックトレーナーによるこどもの体力向上事業【2次審査】

【委員】

小中学生を対象とした事業として、講演の内容についても具体的に示していただいているが、大人が見ても難しそうな言葉があったので、小学生を対象に20分間でこのような内容を十分理解できるような講演を行った実績があるのかどうかを教えてください。

また、時間配分について、講演20分、実技40分、個別相談会60分とあるが、これは授業の時間とは合致していないので、今回の事業については本課の中に入ろうと考えているのか、それとも違う形でのやり方を考えているのかを教えてください。

【健康教育課】

小学校は45分、中学校は50分の授業時間であるため合致していないが、準備の時間なども取りながら、授業を2時間続きにするなどして実施ができればと考えている。個別相談については、放課後の時間などを利用しながら実施できればと考えている。

【アスレティックトレーナー長崎県協議会】

講演の実績については、2014年の長崎国体の6年ぐらい前から国体のターゲットエイジ、国体開催時に少年の区分にあたる子どもたちである小学校高学年の子どもたちに対して講演等を行った実績がある。今回は大人向けのプレゼンなので難しい言葉もあったが、子どもたちに対して話をするときには、当然子どもに分かるような内容で行うようにしている。

【委員】

小中学生を対象にするということだが、小学生低学年については対象ではないという考えか。

【健康教育課】

基本的には中学校入学前の小学校5～6年を対象と考えているが、学校の規模によっては、生徒数が少ない学校の場合は低学年も対象とするかもしれないと思う。モデル校によって変わってくる可能性はあると思うが、基本的には小学校5～6年生と思っている。

【委員】

モデル校を小学校3校、中学校3校を選定するとしているが、学校の選定はとても難しいだろうと感じている。学校現場は現状でもカリキュラムがいっぱいなので、こういった時間を取ることはとても大変だと思う。こういった基準で選ぶことを想定しているのかを教えてください。

【健康教育課】

来年度の事業開始に向けて、3月のうちから平成29年度に向けた相談を各学校にしていこうと考えている。新年度になってからでは難しくなるが、前年度から動き出せばスムーズに入っていけるのではないかと思う。長崎市内は小学校が70校、中学校が40校あるので、まずは団体が活動しやすい範囲から選定していきたいと考えている。

【委員】

とても大事な事業だということは分かったが、なぜ長崎の子どもたちは柔軟性が低いのか、その原因が分かるのであれば教えていただきたい。

【健康教育課】

原因についてははっきりとしたことが分からないが、長崎は坂道が多いまちなので生活の中ですぐに車や公共交通機関を利用することが多いことも原因のひとつではないかと考えている。また、体力向上のために登校後みんなでグラウンドを走る取組みを行う学校は多いが、それ以外の取組みが少ないことも原因として考えられるのではないかと思う。

【委員】

事業のスケジュールについてだが、具体的に7月、9月、12月、3月としてあるが、期間が空いてしまうと、子どもたちは話がリセットされてしまう場合もあると思う。4回をつめて実施するというのもひとつの方法ではないかと思うが、期間を均等に分けているというのは、もちろん学校との調整次第という部分もあると思うが、スケジュールについて実現性を重視しているのか、それとも効果を重視しているのか、そのあたりの考えについて教えていただきたい。

【健康教育課】

柔軟性や筋力などについては、集中して行っても結果は出ないので、年間を通じて実施した方がいいと考えている。ただ、子どもたちが忘れてしまうこともあるので、柔軟性の実施チェック表のようなものを作って、それを毎日付けてもらうようにしながら、定期的に団体に入ってもらい、最後にまとめもやっていただくような流れでやっていきたいと考えている。

【委員】

個別相談会について、子どもたち自身が「身体がかたい」「柔軟性がない」ということをどのくらい意識しているかということもあるので、実際に子どもたちが相談してくるのかどうかを疑問に思っている。そのことについて、全く来ない場合でも時間を確保しておくという考えなのか、実技指導を行っているなかで身体がかたい子どもに声かけをしながらということを考えているのか教えていただきたい。「個別相談」ではなく「個別相談会」としてまで実施することについて、現状のニーズがあるのかについて教えていただきたい。

【健康教育課】

中学生については部活動もあるので、自分の身体のことについて養護教諭に質問をする子どもが結構いる。養護教諭は、トレーナーではないので病院に行くことを勧めるが、ここにトレーナーが

入っていくことで、どんな病院に行った方がいいのか、実は内科的なことが要因であったり、骨自体のことだったり、筋肉のことだったりするなど「どうかな？」ということを経験的な知識がある人に相談できるようになる。

小学生については、小さい子どもから相談することは難しいこともある。実際に行うときは保護者にも案内するように考えているので、保護者からの相談という形もあるのではないかなと思う。また、実技指導を行っている際に、動きがぎこちない子どもを呼んで個別に指導するという形もできるのではないかなと思う。

【アスレティックトレーナー長崎県協議会】

これまでも中学校や高校の現場での指導を行ったことがあるが、そういった時に私たちから見ても明らかにおかしいと気付く子どもがいる。そういった子どもに個別に声かけをすることもあると思う。

【委員】

先ほど小学校70校、中学校40校の中からモデル校をピックアップするという話の中で、団体が動きやすい範囲の中から選定していきたいとのことであったが、それ以外に学校選定にあたりポイントとして考えていることはあるか。

【健康教育課】

現在、各学校の体力テストの数値を集計しているところになるが、その中で柔軟性の値が良い学校は対象から外してもいいのではないかなと思っている。おそらく、専門知識がある人がいて、一生懸命取り組んでいるのだろうと思う。なかなか数値が上がらない学校もあるので、そういった学校をピックアップしていきたいと考えている。教育委員会でも体力向上アクションプランというものを作っているのですが、柔軟性がなかなか上がらなくて困っているという学校を選定できればと思っている。

【委員】

学校側との連携が必要な事業については、受入側の学校の先生のパーソナリティによってうまくいったりいかなかったりということもあるので、今言われたような形で、本当に問題を抱えた学校を選んでいくということが大切ではないかなと思う。

【委員】

おそらく事業を2年間実施することを想定されていると思うが、事業終了後のことをどのくらい考えているのか、将来的にはどういう関係でやっていこうと考えているのか、今の段階で構わないので想定を教えてください。

【健康教育課】

柔軟性を高めていくということで6校実施して、その後をどのように発展させていくかという話をしている最中になる。1年間の中で結果が出るようであれば、その後も少しずつ普及させていきたい

と思っている。また、柔軟性だけでなく、他にもできることがあるので、次は投げる力が弱いのでそういった部分に今度は入ってもらいたいということもできると思う。

【アスレティックトレーナー長崎県協議会】

終了後については、色々なパターンがあると思う。私たちの団体は、長崎市内のメンバーが7人いるので、そのメンバーがそれぞれの学校に入っていく。このくらいのペースであれば、全学校とまではいかないが、半分以上の学校に巡回で入っていくことは可能だと考えている。

～質疑終了～

長く元気で！応援事業【中間報告】

【委員】

協働事業終了後もノウハウを活かしてやっていきたいという話であったが、おそらく行政がする分、団体がする分、もしかしたら一緒にやる分もあると思う。年度後半から整理していきたいということだろうが、今の時点でどんな形になりそうだとすることがあれば教えていただきたい。団体の役割がどうなりそうかということはプレゼンを聞いている中で想像できる部分はあるが、担当課が果たしていく部分がどんなことになるかが見えにくいので、今の段階で構わないので教えていただきたい。来年度の事業については、内部の予算折衝の段階ということもあるかもしれないが「決定していないので分かりません」というのは「何もやりません」ということと同じことなので「こういうことはしっかりとやってみたい」という意気込みも含めて話していただければと思う。

【高齢者すこやか支援課】

出前セミナーやアラカンクラブについては、団体が継続してやっていくということでもいいのではないかと考えているので、お任せしたい。イベントについては、今後も一緒にやっていった方がいいのではないかと考えているので、これは終わりにならないようになんとか続けていきたいと思っている。

【委員】

団体も同じような考えでいるということによいか。

【ながさきダンカーズ倶楽部】

はい。

【委員】

メンバーに30歳代の方が入ってきたということは、おそらく想定していなかったことと思うが、どういった意図で入ってきたのか、どういったことに興味があって入ってきたのか、特に意図もなく入ってきたのか、どういった感じなのかを教えていただきたい。

【ながさきダンカーズ倶楽部】

メンバーとして入ってきた30歳代の方は、ながさきダンカーズ倶楽部が何かおもしろいことをやっているなということで興味を持たれ、「何か一緒にできることはありますか」ということでお尋ねがあり、特に断る理由もなかったのでメンバーとしてお手伝いいただいている。それ以外のメンバーは50歳代から60歳代の方で、我々が想定していた年齢層の会員となっている。

【委員】

長崎アラカンクラブの事務局をランタナに置いており、会員は今のところ10人ということであったが、少しずつ増えてきているのか。また、相談を行っているとのことだったが、この事務局で「こういったことをやりたい」など、今後のことについての相談を受けた実績があるのか。

【ながさきダンカーズ倶楽部】

相談はまだない。現役世代の方に、こういったことを考えていただくということは非常に難しいと感じている。ただ、体験会などを長崎新聞や広報ながさき等に告知すると、それを通じて問合せをいただくことがある。そういった時に、長崎アラカンクラブの目的や内容を説明することで、会員になりますと言われる方もおり、少しずつ増えてきている。

【委員】

色々な方が参加をされていて広がっている感じがする。広げていくということも意味があることだと思うが、こういった形で精力的にやっていくなかで、具体的に企画化などを考えていることはあるか。

【ながさきダンカーズ倶楽部】

長崎アラカンクラブは、ながさきダンカーズ倶楽部として5年ほど活動をしていることをベースにしてやっていこうということでスタートしている。そのため、事務局についてはながさきダンカーズ倶楽部の会員が兼務している状況です。ただ、現役の方にセカンドデビューをなるべく早くから考えてもらうということは、私たちの反省を含めて伝えていけないと思っている。中身はこれから考えていけないが、長崎アラカンクラブでは様々な体験会を含めた啓発活動を中心に運営していければと思っている。

【委員】

事業の中での様々な企画については、ながさきダンカーズ倶楽部がノウハウやアイデアを出していると思うが、団体のメンバーの構成、年齢等を教えていただきたい。

【ながさきダンカーズ倶楽部】

団体メンバーの平均年齢は約68歳になると思う。50歳代が数名、ほとんどが60歳以上の方で、特に65歳以上の方が中心となって運営をしている。そのため、ながさきダンカーズ倶楽部に50歳代の方から問合せがあった場合には、長崎アラカンクラブにお誘いするという流れになっている。

【委員】

昨年度「よかもん！アラ還大会」に参加した際に、ターゲット世代よりも上の世代の方が多かったように感じた。イベントの内容が、ながさきダンカーズ倶楽部のメンバーの方にとって楽しいものになっていて、もしかしたらひとつ下の世代の方にとっては少し合わない部分があったのかもしれないと思う。今回の事業でターゲットとしている55～65歳の方と世代の違いを感じるようなことはないか。

【ながさきダンカーズ倶楽部】

たくさんある。昨年度のイベントについては、参加者の年齢がターゲットよりも少し高い方が来るだろうということはある程度想定していたことでもある。ただ、その中で55～65歳の方が何人来

たか、おそらく1割強がターゲット世代の方だった。内容についても、指摘があったとおりでと思うので、第2回、第3回と開催していく際にはターゲットに合わせていくための企画を考えていきたいと思っている。

【委員】

出前セミナーについて、企業の方に「やりませんか」と提案しても、なかなか難しいところもあると思う。従業員数が多い企業にアプローチする方が効果的だとは思いますが、小さな企業にそういったニーズがないかというところでもなかつたりする。中小企業や非営利組織などにきめ細かく、たとえ対象者が少なくてもアプローチしていく、またはそういった企業の連合体のような組織にアプローチしていくこともこれから必要になってくると思うが、現状のアプローチ方法はこういった形になっているかを教えていただきたい。それから、きめ細やかにアプローチしていくとなったときに考えられる今後の課題などがあれば、教えていただきたい。

【ながさきダンカーズ倶楽部】

現状としては、企業の総務・人事の方にダイレクトメールを送っている。それは、ある程度社員数が多いであろう企業を25社に対して送付した。それ以外には、それぞれの知り合いなどの紹介で総務・人事の方にお会いしたのが2社あった。どこまで掘り下げてアプローチしていくかということについては、今のところはどうしても大きな企業をメインとしているが、それ以外については今後検討していきたいと思っている。

【委員】

具体的な話については団体がしていくことになるのかもしれないが、場の開拓については担当課が、または担当課が別の担当課につないでという形でもいいが、行政としてアプローチしていく必要があるのではないかと思うが、そのあたりについての考えについて教えていただきたい。

【高齢者すこやか支援課】

まだまだ足りないと思っているが、高齢者すこやか支援課自体が、企業等とあまりつながりがない部署のため、こういった形でアプローチすればいいのか分からなくて戸惑っている部分もある。今後PRしていきたいと思っている。

【委員】

企業関係であれば商工の部局、また、コミュニティ関係の部局のつながりもあると思うので、そういったところと連携しながらやっていただければと思う。

【委員】

本日のプレゼンには、これまで来られていた団体の代表者ではない方が来られているが、それがすごく良いことだと思った。今、ながさきダンカーズ倶楽部の中で、団体の目的や行っていることを話せる方はどのくらいいるか。質問の意図としては、こういったプレゼンの際に、団体の代表は活動への思い入れもあり何でも話せるが、他のメンバーがお手伝い程度の感覚の方が多いというケ

ースがよくあるので、現在の団体内の状況について教えていただければと思う。

【ながさきダンカーズ倶楽部】

これまでは代表者に頼りきっていた部分があったと思う。ただ、代表者が別の仕事を始めたことを機に、私たちが事務局を担うようになったり、副会長を2名にしたり、役割分担を明確にしようという話が役員の中でされた。そういった意識は、役員、会員の中にだいぶ浸透してきたと感じている。

～質疑終了～

アクティブ世代のスポーツライフ支援事業【中間報告】

【委員】

ノルディックウォークの普及教室、その後のフォローアップとしてのクラブでの活動への参加者数を示してあったので分かりやすかったが、長崎市の中でのノルディックウォークの広がり、認知度などについて、もし把握できていたら教えていただきたい。

【(特非) 長崎ウェルネススポーツ研究センター】

現状としては、そういったことについては把握できていない。長崎市の市民意識調査の中で「日頃運動行っているか」「どういった運動を行っているか」という形で種目別で把握ができるようになっていたので、今後その数値を参考に見ていきたいと考えている。

元々ノルディックウォークという種目を選んだのは、市民意識調査の中で「運動をしている」という人の中で第1位の種目がウォーキングだったので、そのウォーキングをランクアップさせたものを取り入れていくと、市民の皆さんにも興味を持ってもらえるのではないかと考えた。

【健康づくり課】

このノルディックウォークについては提案型協働事業で取り組んでいる部分だけではなく、介護予防、生活習慣病予防ということで、行政センターエリアでも重点種目に入れていただいている。今のところ、野母崎や高島では、住民の方が自主的にやっているということを知っている。また、元々東長崎の方にあった自主グループの方たちも去年の教室に少し入ってきたが、今年に入ってポールを借りたいという相談があったりしている。そういった形で、少しずつだがそういった問合せが増えてきていると感じている。

【委員】

ポールの貸し出しについては、行政でしているという話であったが、これは提案型協働事業終了後も継続して貸し出しをしていく予定か。

【健康づくり課】

市が行う教室に関しては、ポールは無料で貸し出ししていこうと考えている。自分のポールを持っている人も徐々に増えてはいるが、なかなか最初から購入することは難しいということもある。来年度については、健康教室の講座やイベントの中で、初心者の方にたくさん来ていただけるような環境づくりを継続してやっていきたいと思っているので、ポールについても無料で貸し出ししていきたいと考えている。

【委員】

昨年度の事業報告の際にはターゲットとする世代より少し上の世代の参加が多かったということだったが、今回はターゲットとしているアクティブ世代の参加状況など、実際の参加者の状況はどうなっているか。

【健康づくり課】

4月から5月に行った普及教室については、延べ人数176人、実人数99人の参加があり、そのうち新規の方が約8割だったので、私たちも少し驚いた。年代は、昨年もそうだったが、ターゲットとしている64歳以下の方が約4割、69歳以下まで広げて見てみると約6割強となっている。現役世代が参加しやすいようにと思い、開催日を土曜日に設定しているが、なかなか難しいなと感じている。

【(特非) 長崎ウェルネススポーツ研究センター】

クラブについては34人の会員がいるが、4分の3ぐらいが65歳未満の方になっており、それ以外の方は65歳以上の方という状況になっているので、クラブについてはターゲットとしている世代にマッチしていると感じている。

【委員】

最近、このあたりでもノルディックウォークをしている人をたくさん見かけるので、普及してきたのではないかと感じている。

【委員】

ターゲット世代へのアプローチについては、なかなか難しい部分があると思う。そういった中でも、クラブについてはターゲット世代が多く参加しているという状況もあるので、どういった違いがあるのか、その要因として考えられることがあるか。これから、こういった世代にアプローチする際にどうすればいいかなど、思い当たることがあれば教えていただきたい。

【(特非) 長崎ウェルネススポーツ研究センター】

クラブの参加者について、お金を出してまで技術を学びたいという方は「結構良かったな」と思って参加している人が多いと思う。ターゲットとする世代の方は「お金を出してでも少しレベルを上げたい」という意識があるのではないかと感じている。

普及の部分に関しては、無料で行っているので「少しやってみようかな」という方が多いので、年齢も少し高くなってしまわないかと思う。

今の形で、普及については無料で多くの方にやってもらいながら、ターゲットとする世代の方に継続してもらえよう流れを考えていけないかなと思っている。

【健康づくり課】

はっきりとしたことは分からないが、ポールを持って歩くのが恥ずかしい世代ではないかということがある。また、ポール自体が介護用品と勘違いされていることもある。あるデパートに行ったときに、高齢者の介護コーナーにノルディックウォークのポールが置いてあった。それは、ノルディックウォークではなく、ポールの先が丸くなっているポールウォークで、体の前にポールをつけて歩くことで膝が悪い方が使ったりするものになるが、やはりそういったこともあるので、50歳代の方が使う物という感覚があまり浸透していないので、PR不足もあるのではないかと感じている。

【委員】

ノルディックウォークについては、福岡に比べても、長崎のまちなかでやっている人を見かけることが多かったり、ノルディックウォークの話題が出ることがあったりするなど、明らかに長崎で増えてきているということを感じるが、そうなってくると次の課題が出てくると思う。やりたい人、そして実際にやる人が増えてくると、運営する側、団体だったり行政だったりすると思うが、そのあたりへの負担が大きくなってくると思う。もしかしたら、クラブの運営に仲間づくりということも含まれているかもしれないが、実施していく側の仲間づくりについては、将来的にどのように考えているかを教えていただきたい。

【(特非) 長崎ウェルネススポーツ研究センター】

今のところは受益者負担をいただきながら、指導ができる人材を確保していくという形で進めていくしかないと思っている。同様の形態で運営しているランニングクラブについては100人ぐらいのメンバーがいるが、その中で3~4年続けているベテランの方をボランティアスタッフとしてお願いするなどの展開ができていますので、ノルディックウォークについても、3~4年続ける方をボランティアスタッフとして関わってもらえるような流れができていけばいいのではないかと考えている。

【委員】

ノルディックウォークについては、陸上競技場や公園で歩くだけでなく、それぞれの家の近くでやる人が多いと思うが、ポールを使いながら歩く種目なので少し人が多いところでは危険が生じることもあると思う。そういったことを考えて、例えば安全に歩くことができるルートの設定などを考えていることがあれば教えていただきたい。

【(特非) 長崎ウェルネススポーツ研究センター】

まちなかでノルディックウォーク教室を実施した際に、「危ないのではないかと」と苦情を言われたこともあった。そういったことを踏まえ、マナー啓発をしなければならないということで、ホームページにも注意事項などを掲載して呼びかけたりもしている。

マップに関しては、健康づくり課で取り組んでもらえればと思うところもあるが、現在市内のウォーキングコースを60ヶ所ぐらい設定されているので、その中でノルディックウォークでも歩きやすいコースというものを考えていただければいいのではないかと考えている。

【健康づくり課】

ウォーキングコースを数年かけてつくってきたものがある。10月1日のアマランスフェスタの時に、ウォーキングとノルディックウォークのふたつのウォーキング講座を行ったが、それぞれ同じコースを歩いていただいたということもあるので、これまで作ってきたウォーキングコースの中で安全なコースを認定していければと思っている。

～質疑終了～

絶滅危惧—長崎文化再生事業【中間報告】

【委員】

今から冊子の作成に入っていくということで、スケジュール的には少し遅れ気味ということで聞いているが、遅れているということであれば遅れを取り戻していかなくてはならないと思う。団体の体制面もあると思うが、単純に頑張りますということではなく、これからスピードアップしていくために、どういった対策をするのかを教えていただきたい。

【長崎町人町プロジェクト】

頑張っていくしかないと思っている。冊子に掲載する資料等は揃っているの、あとはライティングを詰めてやっていくことになると思う。

【委員】

スケジュール管理については、団体がメインでやっている形になるか。担当課がスケジュールについて関わっているか。

【まちなか事業推進室】

スケジュールについては、こちらの担当者と月1回は協議をしながら進めている。先日行った「栗名月」については、重ねて協議したりもしており、普段から綿密に打合せをしている。全体的に見ると少し遅れ気味ではあるが、今の想定の中では大きく遅れることなく、12月ぐらいまでにはなんとか取り戻して、当初の予定に戻していこうということで行っている。

【委員】

中間報告の自己評価シートに書かれていることとして「栗名月では新規参加団体が増え、地域の多世代の様々な団体が協働して事業を実施し、広がってきた」というようなことが書かれているが、そのことについてもう少し詳しく教えていただきたい。

【まちなか事業推進室】

地域の子どもたちについては、これまで諏訪小学校を中心に少し連携をしていたが、今回のイベントでは皓臺寺幼稚園や中央保育園など次の世代を担う方々に広がりが出てきたということがあった。また、今年は天体観測を初めて実施し1日200人～300人の参加があったり、お茶会を表千家、裏千家の有志の方にやっていただき1日180人ぐらいの参加があったりするなど、今までこういったところに参加していなかった層の方々に参加していただくということがあった。他にも、月見屋台というものを初めて実施したが、これは将来的な商業の活性化という部分も目標にあるので、磨屋町青年会を中心にしながら中通り商店街の店舗の方々が、月見をテーマにした商品を集めて販売したりもした。大学に関しては、これまでは県立大学シーボルト校と連携していたが、今回は長崎大学、長崎総合科学大学にも参加していただき、3つの大学と連携しながら竹灯籠などに参加していただいたりした。企業についても、これまでは九州電力に協力していただいていたが、今回からはみずほ銀行、長崎銀行、メモリードなど色々な方々に参加いただくようになるなど、新しい参加団体が

多くあったということです。

【委員】

中間報告の自己評価シートの来年度以降の事業の継続についてだが、「新たな協働者が現れ」とか「新しい協働プロジェクトの発展」という記載があるが、これは先ほど答えでは「参加者が広がってきた」ということと「運営側にも加わった方が増えている」という両方のことがあると思うが、新しく加わった方たちとの「新たな協働のプロジェクト」というものがどういったものになるのかを教えてください。

【まちなか事業推進室】

「新たな協働のプロジェクト」ということで、みんなで集まって勉強会、研究会を行ったりしている。それがそのまま形になっているかどうかはまだ分からない部分もあるが、色々な方々に興味を持っていただき、プレーヤーとして参加していただくという動きが見えてきたというように感じている。

【委員】

勉強会のメンバーはどういった方々になるか。

【まちなか事業推進室】

大学生、企業の方、地元の自治会・商店街、市民団体の方などになる。

【委員】

冊子づくりが遅れていることについて、取材の難しさがあったということであったが、それについて具体的に教えてください。

【長崎町人町プロジェクト】

取材の難しさについては、ひとつはかなり天候不良に見舞われたということがある。それから、取材に協力していただくところには必ずしも好意的でないところもあり、手続きが非常に難しいと感じた。歳時というのは時期が決まっているが、手続きを踏まなければ取材ができないというのがあった。また、団体のメンバー自身が歳時に関する催しの執行部として関わっている場合が多いため、その運営をしながら取材の時間を確保することも難しかった。単年度だけで全ての歳時を取材するのは難しいと感じているので、今までの資料を使ったり、他の資料を借りたりしながら、冊子を作成していこうと思っている。

【委員】

これからのことについて、先ほど発展させていくというような話もあり広がっていくのかなと感じているが、長崎町人町プロジェクトという団体としての取組みは、来年度以降はどのように考えているのか。

【長崎町人町プロジェクト】

団体のメンバーは、長崎夜市実行委員会のメンバーもほとんど兼ねている。また、中島川流域委員会のメンバーもほとんど兼ねている。だから、同じ人たちが違った組織で動いているという状況になる。長崎町人町プロジェクトのスタッフは6~7人しかいないので、団体単体での活動というのは不可能ではないかと思っているが、実行委員会形式で続けていければと考えている。

【委員】

今回の事業は、冊子を作成し、町人文化を活かしたイベントの開催や商品化を目指していくということが目的であった。まだ冊子が完成していない状況ではあるが、今取材をしているものの中で「この素材だったらこういったことができるのではないか」というようなものがあれば教えていただきたい。

【長崎町人町プロジェクト】

個人レベルでは挙がっているのが、それぞれの意見もあるので、一緒に話をしながら進めていきたいと考えている。間違いなく次年度以降はできると考えている。

【まちなか事業推進室】

ひとつだけ具体例を挙げると、「亥の子餅」という和菓子について、中通商店街の和菓子屋を中心に顕在化していこうという動きが始まっている。元々、亥の子（旧暦10月の亥の日）亥の刻（午後10時ごろ）、暖房器具を出す時期に、縁起が良いということで猪を模した和菓子を食べるというものになるが、こういったことがこれまではされていなかったが、今後地域の方で光を当てていこうという動きが始まっており、11月ぐらいからそれが始まりだす予定となっている。

【市民協働推進室長】

今回作成する冊子をどう活かしていくかについて、この場であらためて話していただきたい。

【長崎町人町プロジェクト】

企画段階で予定していた配布計画のとおり、商店街や地域店舗に1,000部、学校、自治会、メディア、学さるく参加者、行政、シンポジウム参加者など、当初の予定通りに配布しようと考えている。これは、早い時期、1月か2月には配布できればと思って、進めていこうと考えている。

～ 質疑終了 ～

2 委員長コメント

本日は、2次審査及び中間報告ということだったが、気付いたことを少しコメントさせていただきたい。

2次審査については、いつもは行政にもっと頑張ってもらいたいと思うことが多いが、本日は行政が頑張っていたので良かったと思った。

アスレティックトレーナー長崎県協議会と健康教育課の事業についてだが、担当課の方がよく話をしていただいたことが良かった。市民提案型の場合、行政側が付き合ってもらいたいという感覚が多いが、今回はおそらく事業調整の打合せを通して、ベクトルが同じ方向に向いてきたのだろうと感じたので、協働していくための条件が整ったのではないかと思った。

次に中間報告の、ながさきダンカース倶楽部と高齢者すこやか支援課の事業については、こういった事業を実施する場合、市民活動そのものがそうである部分もあるが、事業を始めた方の思いがとても強く、その人以外は何も知らないというケースが結構多かったです。そのため、その人が少し引いてしまうとその活動自体が終わってしまうこともよくある中で、今回は団体内で事務局の役割分担をきちんと行い、メンバーの皆さんが自分の責任感のもと、きちんと活動されているということがとても大事なことだと思った。過去にも長崎市内のいくつかのNPO法人が、お金の話、労力の話、色々な問題があったときに、そういったことを理事長しか分かっていないために、解散することになった団体もあった。そういったことを考えると、組織としてきちんと維持されているということは素晴らしいと思った。

次に、NPO法人長崎ウェルネススポーツ研究センターと健康づくり課の事業については、担当課の方で来年度の展開について予算化を進めているということで、ノルディックウォークの入口の部分は行政が進め、その先の部分を団体が担うという形で役割分担に明確にした上で新年度を迎えようとしているところが非常に良かったと思う。これまでの提案型協働事業の中では「事業終了後のことについては、これから検討します」と言われることが多かったが、今回は来年度を見据えた形で進めているということは良かったと思う。

最後に、長崎町人町プロジェクトとまちなか事業推進室の事業については、1年間で事業を終了するということであるが、事業終了後の形として他の団体との協働が始まっているということが良かったと思う。今回の事業で作成される冊子は、単に本が好きな人に読まれるものではなく、地域の人に使ってもらい、学校で使ってもらいということが重要だと思うので、先ほどの亥の子餅のような事例が少しでも増えてくることがこの事業の成果になると思うので、そういったことを意識しながら取り組んでいただければと思う。

どの事業についても、協働していくうえで大事なポイントがそれぞれのプレゼンに詰め込まれていて、面白かったのではないかと思う。そういったところを、審査委員も見ているので、今後参考にさせていただければと思う。